

路上文芸総合雑誌『露（Rojuku）宿』

2000年8月25日発行

# 露宿 rojuku



第8号

定価500円

## 露宿

目次

表紙写真	大川 砂由里	
文中挿絵	瘧師 辰雄	
文中写真	岡田 知子	
路上の推移	富士森 和行	2
歌集「亡国の旗」より	望月 大成	3
陽だまり 1 6	秋戸 空	7
青春挽歌ほか	弓削 鴻介	8
詩五編「凍みる靴音」ほか	阿部 新一	9
詩四編「東京」ほか	土屋 太	11
無題	名無しの権平の方々	13
風鈴	風来坊	15
盆が来る	川辺 南草	
無題	安藤	16
俳句など	志貝 正	17
短歌	清翠	
無題	Uさん	
人生の別れと出会い	宗春	18
歩く	瘧師 辰雄	19
社会生活と病気生活	新城 秋男	
無題	Tさん	20
最近の私、ためいき	Eさん	21
只今入院中です	只野 酔払	22
私の事	本間 正治	23
ぼくわたしらはみんなきている	恩田 美代子	24
ある初夏のできごと	織田 哲	25
湊町より	高橋 美香	27
東京路上ふらり散歩	笠井 和明	28
	岡田 知子	
露宿の本棚『光ほのかなれども?』		
二葉保育園と徳永恕』	池田 幸代	35
恩田さんへ	土屋 太	36
土屋さんへ	恩田 美代子	
はり師いが丸の肝心かなめ	はり師いが丸	37
編集後記		38

# 路上の推移 九首

## 富士森和行

老人痴呆症ふせがむとして吾が思い日々詠ふ中に兆候現わる

桑畑の紅き実ゆる、幻の老人ホームかくて吾れも隔離さる、  
鄙びたる駅の踏切超えゆくにたゞ懐しき富士森公園

平和統一の願い結ばれ国境の柵消ゆ國の民族の歓声

(南北統一平和宣言に想ふ)

浅川の流れに沿いて登りたるその昔の吾れも高尾も若し

昭和史の弔意とも云ふべし一介のホームレスの吾れ記帳ためらふ

(皇太后崩御に想ふ)

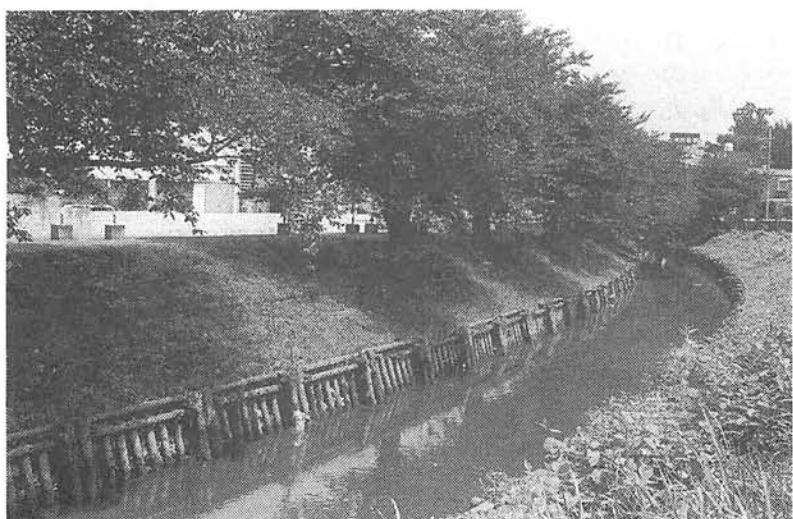
自立支援の施設漸くみのり行くこの掛替えのなき棧を活かしめよ

(自立支援センター施設設立に想ふ)

菖蒲田に遙るばると来て蛙鳴く久しく生きてある歓びよ

新宿の連絡通路とき充ちて路上の推移のいかに虚しき

七月七日





日の丸を燃やして嬉し 祝い酒

亡国記念日の  
旗は掃きだめ

建国の記念日とて何もなし

あぶれの馬に  
焚出しの列

国破れ 残るはあら野 馬捨山

見たることなし

日ノ丸の旗

国旗ならお天道様のあらぬ国

黒地に白の  
まん丸の月

見渡せば亡国の旗 どこもなし

赤旗なびく

馬捨の山

お笑いや 国旗日の丸 戰地にて

白地に小丸

梅干の旗

日の丸はお天道様には見えぬなり

日本列島

陽あたらぬ国

亡国の旗は掲げず 馬捨山

建国日 白地に赤は梅干で

日の丸弁当

馬捨の山

祝うなら焚出し弁当 日の丸で

馬に給せよ  
これぞニッポン

建国の旗

日の丸で腹が満たせるわけがない

馬に給せよ  
これぞニッポン

梅弁の飯

愛国心 持つはずがなし 亡国の  
国なき民は  
馬人の街

天皇家 変態なるか 菊の紋  
痴女の裏口  
御家紋にして

建国日 梅干弁当 引っ下げて  
同期の梅で  
梅祭りかな

亡国日 黒地に白の旗立てよ

中の丸の字

馬捨の月

力づくこじ開けられて天照

岩戸の沙汰は

国の始まり

日の丸は裏を返せば月の丸

黒地に白じ

弔いの旗

國破れ山河ありとは嘘つ八

山はなくとも

馬捨の山

宴あり 黒地に白の月にこそ

花は夜桜

月も太陽

世の中はお天道様に米の飯

まさかおテント

日の丸のこと?

ヤマにては馬人すべて無国籍

あるはずなきぞ

日の丸の旗

玉姫の暴力職安 ヤー公並み

音沙汰なし

浅警とグル

半市民 死ぬことのみを望まれて

愛国心など

さらゝのさら

虎ロープぐるゞ巻きで殴る蹴る

稼がせて後は薬殺 競走馬

山谷の馬は

野垂れ死にして

照る月を真昼の太陽とお間違え  
震災はなくとも江戸は大災害

玉抜き踊り

マイコンの馬

あてもなき馬が旅路の白手帳  
二十六駅

みな行倒れ

肋骨を二本折られて泣き寝馬

隅田川辺の

仮設住宅

暴力職安 サツが目こぼし

我ときて遊べき宿のないお馬

ここは天下の

馬捨の山

白を黒 黒を白とて言いくるめ  
嘘の八百

職安の窓

暴力の輪の広がりか 葛飾の

役所で馬人

袋だゝきは

日の丸はタイ米飯に梅干の

紅の一  
点

馬人の餌

安上がり シート巻きなら一万円  
餌で生かせば

馬の屁は

百万の損

戦死なら日の丸被せ榮譽礼

たゞシート巻き

暴力職安

玉姫の怪

玉姫の怪

4

日の丸を作りて隅田　流し雛  
さらば祖国の  
亡国の旗

気をつけよ　ヤマに日の丸　立つる日は

馬を殺しの  
と殺場の旗

狼がよだれたらゝ　馬捨山

もがき、金町  
浅草のデカ

震災で死者七千もお江戸では

馬の殺しが

日常茶飯事

滝連もさぞや嘆かむ　天国で

隅田川辺は

馬捨の原

安きもの　馬の命の値なり

シート巻きして

たつた一万

万札を一枚重ね　シート巻き

火葬場送り

ごみ処理の代

人生はすべてお道化　馬芝居  
役者となれて　  
私は嬉しき

山谷村　馬の人生　山あれば

落ちて谷あり

こゝは馬捨

馬捨山　こゝは地獄の一丁目

二丁目なしの

終着の駅

爺ならば花咲か爺もあるものを

馬に墮ちれば

咲く花はなし

あこがれて都を花の竜宮城

世間知らずは

少年の頃

管理人　報告あれば怪し奴

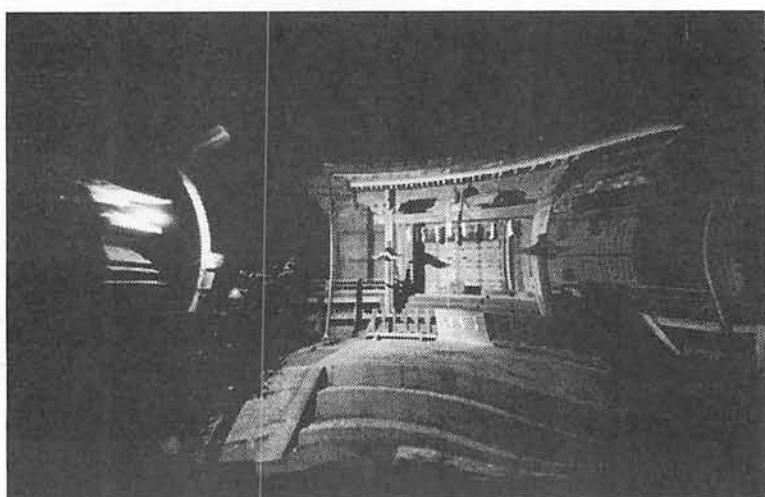
巡りうろちょろ

岡つ引かも

大物と見らるゝことは嬉しけど

名に相応の

働きはまだ



いつの世も空しき人の空涙

一夜明ければ

朝顔の露

山谷には股に傷持つ馬ばかり

エロスの廃園

馬墮ちの道

君が代を聞きて耳だこ 六十年  
歌う気なしの  
馬の屑歌

鬼の眼に涙というはよそら言

馬の眼にこそ

涙なりける

玉抜きで馬は音なし 駐らし馬

エロスの廃園

ドヤも天国

詞書(ことばがき) 書くひまなしの超特急  
六十路の馬は  
停まる駅なし

さじ加減 一つで馬は大変身

玉を抜かれて

ドヤのアメンボ

世の中は憂き事多し 腹下し

下げては上げて

上げて又下げ

たまさかにローカル線で骨休み

歌の日記もて

語り草かな

歌作り 作りたくとも楽器なし

何事もなければ無しの針むしろ

真綿(まめ)で首の

馬暮しかな

一年で生きる千年の生きがいを

待つの心ぞ

立島の松

浦島を知るはずもなし 三十年

腹へればいくさにならず 老戦士

年金待ちで

明日の作戦

限りある馬の寿命と知ればこそ

生きる命は

千よろずの松

馬なれば一代雜種 子育ての

鬼の眼に涙とやらのナニワ節

君が代聞きて

知らず過して  
ついぞほろゝ

救いなし オウム帰りは馬落し

生身のポアは

日の丸のわざ

ホンモノにあらば稼ぎの競走馬

もしや今頃

北の牧場で

救いなし オウム帰りは馬落し

生身のポアは

日の丸のわざ

今日もやつて來た山谷

「仲間」を奪い去つていく  
「じこ」もかしこも 壁のすみに

身体をよせ合つて

・生きる、路上生活者

〈國家、行政に強いられて  
社会性にも強いられた〉

・仲間、を奪い去つていく

ある人々は、ヤンカラ、始める  
あたる陽に乾杯

哀しい現実…?  
そんな場所にも

でもするように…

この日…

路上生活者でない

私がやつて来て

こんな路上生活

いやだしげめんだし

私はできやしない

前の日に雪が降つて

ビショビショになれていた路面

そう考へてしまふ私は…

寒冷の時季には

ここにもアルコールも要るのだ

アルコールがなければ

ねむりにもつけやしない

飲みすぎてしまって

死」が沈黙のうちに

訪ずれて…

〈國家、行政に強いられて  
社会性にも強いられている…〉

多くのさんの、仲間、たちが  
今日も、炊き出し、があるからと  
みんなに活気が満ちてきて

この寒い時季なのに

わあわあとなる

熱氣でいっぱいだ！

陽だまり 16

1999  
12  
30

秋戸空

今日みたいに

陽さしがあたり始めると  
陽のあたる方えよつていく

青春挽歌  
せいしゅんばんか

碎ける波を、夕暮れの、  
ひざけるなみ  
日射しが紅く、染めていた、  
ひざむるそそ  
ああ、初恋の、日は遠く、  
いと  
愛しい君の、面影よ。

白衣の姿、何処へか、  
はくい いはず  
載せて別れた、巡航船、  
じゅんこうせん  
ああ、最果ての、空にきく、  
さいはな さく  
還らぬ君よ、葬礼の鐘声。  
かえりぬ みささぎの きゆうせん

弓削鴻介

湖畔の雨  
こはんのあめ

袂の端を、かみしめて、  
たまどはし  
泣いた名残りの、別れ道、  
ななご  
思い出させて、乙女の胸を、  
おとめの おとめ  
濡らす湖畔の、小糠雨。  
こめかあめ

柳の窓に、降る雨は、  
やなぎの なまめ  
誰が嘆きの、涙やら、  
なげの なみ  
恋に破れた、乙女の胸に、  
やぶれの おとめの おとめ  
しみる湖畔の、夜の雨。  
こはんの よる

湖畔の雨に、濡れながら、  
こはんの なまめ  
いつか歩いた、この道を、  
いつかの おとめの おとめ  
今日も歩けば、乙女の胸を、  
おとめの おとめ  
風が冷たく、吹くばかり。  
つめの まなづ

阿部 新一

弦

凍まる靴音

黒々とした空っぽな心情の流れと  
黒々とした大河と凶暴な闇をはらむ  
街がわからちがたく俺を押し流し  
そのコンクリートブロックの一角に  
ふるえながらたたずむ

走り去ろうとして離れられない  
もどかしさを一瞬でも忘れさせて  
くれるこの冷ややかさよ  
哀しき瞳をさらに傷つける愚か者め  
俺の体でよかつたら暖まつていよい  
心の中に風が吹く  
黒々とした風が

小雪がとぼとぼ降っています  
僕はギター抱え  
こごえた手でしゃにむに弾きます  
センターラインを歩きながら  
車は知らん顔で行きかうんだ  
回りはどんどん小雪にまぶされていきます  
ギターも小雪にまぶされていきます  
夜の灯りが小雪に反響しています  
二、三度叫びます  
僕はむちゃくちゃギターを弾きます  
もうやめていじめないでと  
ギターは泣きます  
僕も悲しくなりました

## ひとつぶの砂

広い浜辺に砂粒ひとつ  
芽を出したヤシの実が嵐で  
流される  
雨の中で砂粒は涙を流した  
太陽近づきかげろうの悲鳴  
を上げる  
じつと夕陽をみつめ赤らむ  
粒と粒とがぶつかつて息が  
つまりそう  
月夜に穴から潮まねきがは  
い出す  
波に洗われ光り始める  
吹けば飛ぶよな砂粒なれど  
人知れず星の砂になろう  
オーライ オーライ オーライ

## 金魚

青白くつややかな膚

ひらりと身をひるがえしたら  
急に胸の中

ガラスの館が似合つてゐる

不思議な光に魅せられて

陶酔と哀しみの間（はざま）に

おののく

あー 私の金魚

あるがままにいておくれ

## 青い瞳

純白の氷の中に 青い水滴  
水晶に光をさし込めば  
ずーと無限大の宇宙に吸い込  
まれていく  
我 愛すべき青い瞳よ  
瞳の下に泣きぼくろひとつ  
そのほくろいつ濡れるの  
愛する人に抱かれた喜びの瞬  
間よ  
君の瞳かげろうがたちこめて  
きたね  
温もりが共鳴している



## 東京

### 帰えろう

そこは人間の縮図、

コリアン、地方から来た人達、

夢を求めて来る人、

色々な人達がおしよせる、

そしてホームレス、

一体そこに何があるの？

もう帰えれない！帰えりたい！

矛盾してゐるよ……。

でも人は集まる……なぜ？

この街は眠らない……

眠る事を知らない……

この街が一度でも眠つたら

変るかも知れない

何もかもが……。

もう帰えろう……。

君がそんなに泣くのなら僕はもういいよ、  
あきらめたわけじやないない、

君は愛してないでしよう！というけど  
ただそこに僕の居場所がなかつただけ……。  
わがままと言われても、

この街じや、つつんでやれない。

心から愛された事があるか？て聞かれても……。  
探してた物ならあつた気がする……。

もう帰えろう……。

そんなに泣くのなら……。

## さびしさ

さびしい時、皆どうしてるのだろう、  
酒を飲む：皆と話す：時には戦う：  
僕はさびしい時、どうしてるのだろう。  
あの子を想つたり、詩を書いたり：  
でも皆、本当にさびしい時つて：  
一番大切な人を想う事だろう。

家族や妻や夫、友人、

僕には一番、大切な人は君だよ：

届かない想いだけど。

## ひとり言

僕はひとりの老人を見た。その老人はだれにも  
わからないひとり言をつぶやいた：。「何もかもが  
ちがう」「何もかもちがう」はつきり聞きとれなか  
つた：でも僕にはそう聞こえたような気がして：。



明日も仲間思ひ、おれ庄ちが居子

古里の山河が生きて立上れ。

夏雲々行くゑがすよ(ナ)

其生寝ころぶ仲間上何思ひ

朝夕涼風立ちて野宿アヨ

1989.8月19日



勝ちゃん

毎日空カン拾ひ告げ円ぐり

これが勝ちゃんの仕事

夜の不燃材朝方にかけて捨集め

朝十時にころと空カン  
の不燃材屋、寝ていろのである

山治では、仕事かくし、空カン集め  
の人ふえた

1989  
6.4 集め

寄せ場の時

日曜 セニター前で列を作て  
たきだしを待てる俺達

70人ぐる列を作つて  
待つてゐる、その中から  
食べだれてる人もゐる。

1989.12.9

消えゆく俺の夢  
“や俺の夢が実現  
していいのだと思う  
夢~~かじ~~さめるようだ”

では現実とはどの  
ようなものであるか?  
宿命ではうほものが、  
現実とは、考えなくて  
頭からいたくなつてしまつた。

一山谷の人の筆

## 風鈴

## 風来坊

盆か来る

川辺南草

夏の風物と云えば誰もが御存知の如く風鈴と朝顔に夏祭りと相場はきまつてゐる。私のアパートの裏庭に姫林檎の木の枝に真新しい風鈴が木の葉と木の葉の間に吊してある。その風鈴が風に吹かれると共に涼しい音色をそっと私の耳を楽しませてくる。まるでその音が生命の如くに。風の吹き具合で音色も変る。人生七転八起と云う諺もあるが、風鈴にも七音、八音があるのかと私は想う。

子供の頃、父が祭りの時に風鈴を買つてくれた想ひ出がなつかしく脳裏に浮かぶ。今も昔もその形成は余り変つていない。人生七十年、私は風鈴の如くに生きて来た。只の風鈴にも思えるが、花の生命も短いが、風鈴の生命さえ夏期だけの寿命である。その短命な中での音色は私を元氣づけてくれる。ある時は逆境に負けるな、と励ましの音、ある時は私がいつも願つてゐる夢をも叶えてくれるような、音色。その音色が、連絡会、支援者の方々の声でもあり仲間の声とも受け止められる。私は運命をいつの間にか風鈴にたくすようになつた。孤独を味合う時、考え方をする時は、自然に風鈴を眺める。その内に風鈴が何かを教えてくれさうな気がする。風鈴よ、お前のお陰でどうにか余生も送られる。有難う、と口づさみ、我が身を振り返る。今も美しい音色を聞き乍らペンを置く。

風そよぎ かすかに揺れる 風鈴の  
音色わびしき 我が身をつねる

盆がくる見たしや見たし孫の顔

夢に抱く孫の重みやあけ易すし

夕焼くる富士に眞向い帰途につく

もくもくと土工等の夕食汗のまま

台風圏まだ寝る場所がきまらない

ダンボールかぶつて寝ていて台風圏

梅雨晴れ間鳩をパン分けて喰いをり

梅雨晴れ間借りていし句集かえさねば

汗ばんだ小銭かぞえしにぎり買う

西空は故郷の方淨土の方夕焼る

無題 安藤

暮れゆく夕空に

人生の花火を上げるもよし

流れる星を見上げ

静かに歩み去るもよし

遅すぎる事なんかない

あきらめる事なんかない

黙つて散るもよし

花火を上げるもよし

誰の物でもない自分の人生だ

覚悟と信念をもつて

残り少ない歩を進めようではないか



2000年、秋、ホームレスによる今世紀最初で最後の国会闘争が始まる。

# ホームレス基本法の制定を! 自立支援事業の法制度化を!

9月1日 国への政策提言発表  
9月~10月 都庁前行動、国会前行動  
10月20日 午後 国会請願デモ  
10月21日 午後 都心部デモ  
10月22日 午後 全国東京集会（室内）

自立支援センター11月開設を勝ち取った新宿連絡会はこの秋、更なる要求を掲げ、国会へと突き進みます。路上死のない21世紀を!野宿から脱せられ、野宿にならなくて済む基本的、総合的政策を国に求めています。ご注目とご協力を!

## 新宿連絡会

東京都台東区日本堤1-25-11山谷労働者福祉会館気付  
TEL 03-3876-7073/FAX 03-3818-3450  
<http://www.jca.apc.org/nojukusha/shinjuku>  
E-mail [inaba@jca.apc.org](mailto:inaba@jca.apc.org)

カンパ金送り先

郵便振替口座：00170-1-723682「新宿連絡会」

俳句など

志貝 正

屋形船

灯も揺れる

すみだ川

涼風の

蒼き彼方に

うろこ雲

浅い陽に

山影延びて

せみのこえ

ふるさとの

よき友幾人裏切り

われ今 路上の宿か

短歌

清翠

梅雨晴れて高尾の緑鮮やかに

夕ぐれせまり鐘の音ひびく

高尾山鳴るは鐘の音蟬時雨

いつしか我れも老いたとみえる

滝の音にあざさい唉し妙音橋

渡る時雨ぎ我が子を偲ぶ

無題

Uさん

仲間たち

梅雨も7月22日ごろに上がるといつてます。

今年わ夏があつくなるようです。

体調管理には十分気をつけてもらいたい。

えいせいめんも十分気をつけてもらいたい。

また15日に発生した両国での仲間のぎやくさつ事件わ  
かわいそうです。

戸山公園でわ少年が花火で路上生活者をおそったとい  
ってます。

お元氣で。

# 人生の別れと出会い

宗春

人生には色々な形で出会い、そして別れがあると思います。

## 第一章 親子の別れ

どんな事情があるにせよ、この世に生を受けてきたかけがないのない子供を親の元から手ばなさねばならない心境は計り知れないのです。例えば父と娘の別れ、母と息子との別れ、又嫁との別れ、といった場合もある。

長年生別れになつた父と娘のふつとした出会いを偶然に知りましたが、親も子供もとまどいをかくせず他人をよそおついていつも血のつながりは濃いものでした。

私が自分の事として置きかえれば、もの心が知る頃は、父親の顔も名前さえ知らないので父親の存在はないのです。

母親は私が生まれてまもなくすぐ上の姉と私を実家において後妻として嫁いでいったようです。

私と姉とも別れて、姉は京都で、私は母の実家であるおじいちゃんの所で育つたのです。

そして育てのおじいちゃんも死別して、母の弟の所、つまり小父さんの所で私は育てられました。私も学校卒業するまで色々な事がありました。

そして、小学校六年生の時、実母を知りました。物心ついてから小学六年まで母親の存在を知るよしもなく、とまどいはかくせませんでした。月日が流れ、母親も色々苦難の道

を歩んで来たことを知り、少しづつ母のことを許せると考えるようになつたのです。

あの苦しい子供時代を思うと子供心になぜ俺を生んだんだと母になげ掛けたこともあつたが、今の私があるのも母だつたと、あります。

私もこのことを路上誌に託すことがありました。今の私はこの不況で仕事もありませんが野宿者として精一杯生きていこうと思ひます。

## 第二章 私と息子との別れ

私も人並に小さなお店でしたが理容業を営むことになり結婚して息子にも恵まれましたが、妻が三十三才の若さで急死、そして妻との別れになつたのです。

子供もまだ小学生でしたので私が育て、手元に置きたいと思いましたが妻の実家で育ててもらうようになり、私と何ら変わらないものと自分でもなき思いでした。

でも子供のために、一生懸命に働き息子も大学校を卒業するまで來たのですが：

けれど息子との別れになつたのです。廻りまわつた運命でしょうか、皮肉です。

息子も嫁をもつて新らしい人生を歩んでいますので私としても安心しているところです。いつかきっと出会いがあると思いまが、私は老い先短い年なので息子に父親として恥ずかしい生き方でなく、父はこんな人だつたと残しておきたいと思います。

私が野宿者であつてもボランティアとして自分の職業を生かして行くつもりです。

最後に、青空床屋只今営業中宜しく。

# 歩く

## 瘧師辰雄

### 社会生活と病気生活

新城秋男

御飯タベル 仕事に行く 火曜日アパートを出て歩きだす。山手通り横ぎり板橋から豊島区マンションで二時間ゴミ出し清掃 そして池袋北口まで歩く。JR新大久保下車。社会保険中央病院。整形外科、内科で見てもらい帰ると午後二時昼めし。それから福祉、神社、寺、サンボする。

水曜日五時オキ。メシミソシルツクリタベル。アラウ。池袋でゴミ出し、高田馬場で二カ所、ハラガナル 階段の登り下り。クタクタアパートに帰る。日曜日がマチドオシイ 月～土曜日まで オナジコトのくりかえし。毎日ヨク歩く、でも体にイイヨ。ツヅクカギリやるよ。千駄ヶ谷荘でも動きすぎるといわれた 歩け歩け

私が社会人になつてもう早四十五十とすぎても何一つ身になる事もなく、自分が思つた事が何一つも役にたつ事もないどころか逆に心配や新宿連絡会の人達に御迷惑をかけるいつもなので申し訳なく心が痛み思ひ悩み発熱を四十度近く三日間つづきようやく二十日の日にようやく平熱にもどる事が出来ました。ですからもうこりごりになりお酒がいかに人をくるわせるのかが心からしんみりとはつきり知らされてぶるぶるとしづれさせられました。ですから、仲間の人達もなるべく深酒だけはしないで、食べる、食事療養にはげんで下さい。なしろ私は体がきほんですから体をだいじに戦つていきましょ。

私自身も体をこわし「お酒の飲みすぎで」体の調子が悪いので病院生活に入っていますが、心から皆様方のあしでまといにならず、頑張るつもりでこの文章をかいて見ました。もしもよければ体がしつかりしたらもう一度貴男達とともに元気な体で戦つていけたら、私自身も本望です。だから皆様方、仲間の方々も頑張つて行きましょう。新宿連絡会の皆様方やボランティアの病院先生越智先生と看護婦や、他の先生方又は針治療の先生のご協力のおかげで皆が元氣で頑張る事が出来る事が何よりもたえがたき幸せなのです。

これからも皆一生懸命頑張つていこうよ。僕は病院内の活力をためていこうと思っています。そうしていかなければ皆の仲間でなくなりそうなので体当たりの氣でぶつかつて行きたいと思つております。

もちろんの事、ボランティアの人達をもつとふやして行くつもりで頑張ります。

ここ東京厚生年金病院の看護婦さんらにも越智先生の評判がおちない様に、ご迷惑がかからないようにゆっくりゆっくりとボランティアになつてもらえる様にもつていきたいと思いペンを置かせてもらいます。

野宿生活をしてる仲間たち七月三日午後四時  
半ごろ俺は都庁地下の中央通りにこしを下していた時  
酒によった仲間らしき人物が自転車でやって来てとぶん  
言ひがかりをつけながら。ケルの暴ポウカを傷き俺も一回  
は反撃したが相手は数回もなぐさりケンカした。  
俺は助けを呼んだが回りにいた仲間はしらんかをもして  
いた。この様子を見て俺は残念でたまらなり  
同じ野宿生活をしてる仲間がどうして見て見ぬふうを  
するのが殘念でならない。このよくな非道をやるやさす  
みんなで助けあつて行きたいと俺は思う。そして  
俺たち仲間が团结心を持って助け合つて行こうと  
俺は思う

## 最近の私

E

毎日、うとラーハ雨の中  
肉体的にも、精神的にも、いつも  
一番一人では、夜おちつて眼めは、事  
最初ビルの地下では、夜中の二時頃になると  
くつ音がすう、上が無人のサラ金がりで  
上に行くお客様さんだと思つた。  
それがだんだん、くつ音が下に近づいてくる  
主人が、そばにいる時は、目をつぶつて、一がみ立てること  
一人の時は、こりくて、内れまいと、それだとうとう  
6月24日の日に階上に、くつ音が、一つかと思つた  
私が置いてた荷物が私の上に落ちてきた。  
しかし、何がされたら地下だけに運ばされない  
この間の集会で両国のお話を聞かされただけに  
よけい、心細い器上での生活が、  
生きて初めての経験なりとまどう事が多  
たりと新宿連絡会の方々おさげで  
何とか生きていける、いつも感謝の気持ちを  
心に、方で、食事をしてます  
自立や、立派な毎日です  
期待が、いつの毎日です

### ためいき

これ程、空が青いと思つた事はなかった。  
木のカリと浮んでる雲が、綺麗だと思つた。  
自然の中で、感じた事が、出来ると、いう事は、  
簡単な様で、本当にすばらしい事と思った。  
私達は、小さな幸福を忘れようとしている。  
都会の街の中、私は人の優しさを、感じる時がある。  
明日も、きっと晴れる様に。

# 只今入院中です

只野醉払

私は今、都立松沢病院に入院中です。  
都立松沢病院は京王線八幡山駅にある。  
敷地は東京ドームが四ヶ入る広さだ。

私が入院中に出来事を記す。

入院して四十五日目、回診の時睡眠薬を止めたいと申し出た。入院は三ヶ月と

決まっていて退院してから睡眠薬なしで眠られるようになりたかったから。その夜から薬は止まつた。十日程眠られなかつた。ほとんど眠らなかつた。もう一度睡眠薬を申し出ようと思つたとたん眠られるようになつた。丁度、捜しものをしていて、一生懸命捜してて探しものが見つかった時に、捜すことが終わるようになつた。

入院も二ヶ月を過ぎるとあきがくる。帰る所がある人は二ヶ月目になると一泊二日、三ヶ月になると二泊三日の外泊が医療プログラムに組み込まれている。私は帰る所がないから病院で過ごす。私は

考へた。単調な生活に少しアクセントをつけようと。

回診の時先生に申し出た。「外泊の代りに墓会所へ行かせてほしい」と。先生曰く。「あなたが入院しているのは墓を打つためではありません。酒を止めるためです」と。

眼科の診療を願い出た。私は白内障なので

す。左目は弱視なので矯正しても0.1しか見えない。三月に眼鏡を作つた時も0.1であつた。五月の一回目の診療の時0.2になつた。六月の二回目の診療の時には0.3になつてついた。どうして視力が回復したのだろうと私は考へた。多勢の患者が集まつた。極め付けは点滴をぶら下げ車椅子で来た人だつた。しかし、みんなが笑つてついた。瞳がかがやいていた。私は初めから終りまで踊つた。知らないのでただ手と足を動かした。でも

こともあるし、また見えなくなる時もあるんです。視力が回復したとは考へられません。」

七月二十六日は松沢病院年中行事の盆踊り大会だつた。昼間の雨のため体育館で開催された。多勢の患者が集まつた。極め付けは点滴をぶら下げ車椅子で来た人だつた。しかし、みんなが笑つてついた。瞳がかがやいていた。私は初めから終りまで踊つた。知らないのでただ手と足を動かした。でも

樂しかつた。

最後に花火を打ち上げた。花火の最後はナイagaraの滝だつた。ワワーと声が上つた。目の前を流れる滝は雄大で、激しく流れた。美しかつた。皆がその美しさをかみしみた。

顔を覆う。頭がクラクラ、ジーンときた。目が痛い。これは何なんだ、どうしたんだ、何が起きたんだと思つた。誰かがタオルをくれた。タオルで顔を覆う。十数秒経つたのだろうか、そつと、そつと、そおうとタオルを取つて目を開けてみる。目が見える。血も少ししか出ていない。眼鏡はどこだ。あつた。割れていない。何だ。鼻あての部分がペシャンコだ。つるが曲つてゐる。それだけだ。何だこれは。奇跡だ。鼻のところが少し痛いだけだ。念のため看室に戻つた。消毒と冷した。

鼻の傷は三日で治つた。

七月二十六日は松沢病院年中行事の盆踊り大会だつた。昼間の雨のため体育館で開催された。多勢の患者が集まつた。極め付けは点滴をぶら下げ車椅子で来た人だつた。しかし、みんなが笑つてついた。瞳がかがやいていた。私は初めから終りまで踊つた。知らないのでただ手と足を動かした。でも

# 私の事

## 本間正治

私が飯場生活に入ったのは離婚によるものでした。その元はアルコールであります。世間ではよく人生の失敗は、飲む打つ買うとあります。私の場合は、正好に酒であります。今、ホームレス状態となつて考えますに同じような仲間がいかに多いかと言うことです。

私は娘が一人おりますがもう何十年もあつております。娘に会いたい気持ちはあります。親の身がつてときらめています。これ以上、親として迷惑をかける訳にはいきません。私の友達で入院して死期もせまつていて病院側から親族の連絡先を聞かれましたが最後まで答えませんでした。私は友達の死に目には合えませんでしたが、彼の気持ちはよく分かります。これが娘でなくせがれだったらと考える時もあります。

今、私は身体の具合が悪く病院へ検査につながっています。結果が出るのに一週間ぐらいかかるのですが、その間ぐらいいドヤに入れてくればいいのですが、結核のうたがいがあると言うのでそれも受けつけてくれません。結果ができるまでの間は一日五百円とカンパンニケだけです。ホントに役所仕事というのは心のない、さみしいものだと感じずにはいられません。

### どんな悩みも、人に言えない秘密も受け止めます

占いカウンセリング 30分につき3000円  
お絵かきセラピー 4000円 初心者割引有

パーティー、イベント、喫茶店、レストラン等  
への出張鑑定も承ります。

守秘義務  
鑑定  
助言

### 紗羅☆夢 (サラーム=平安)

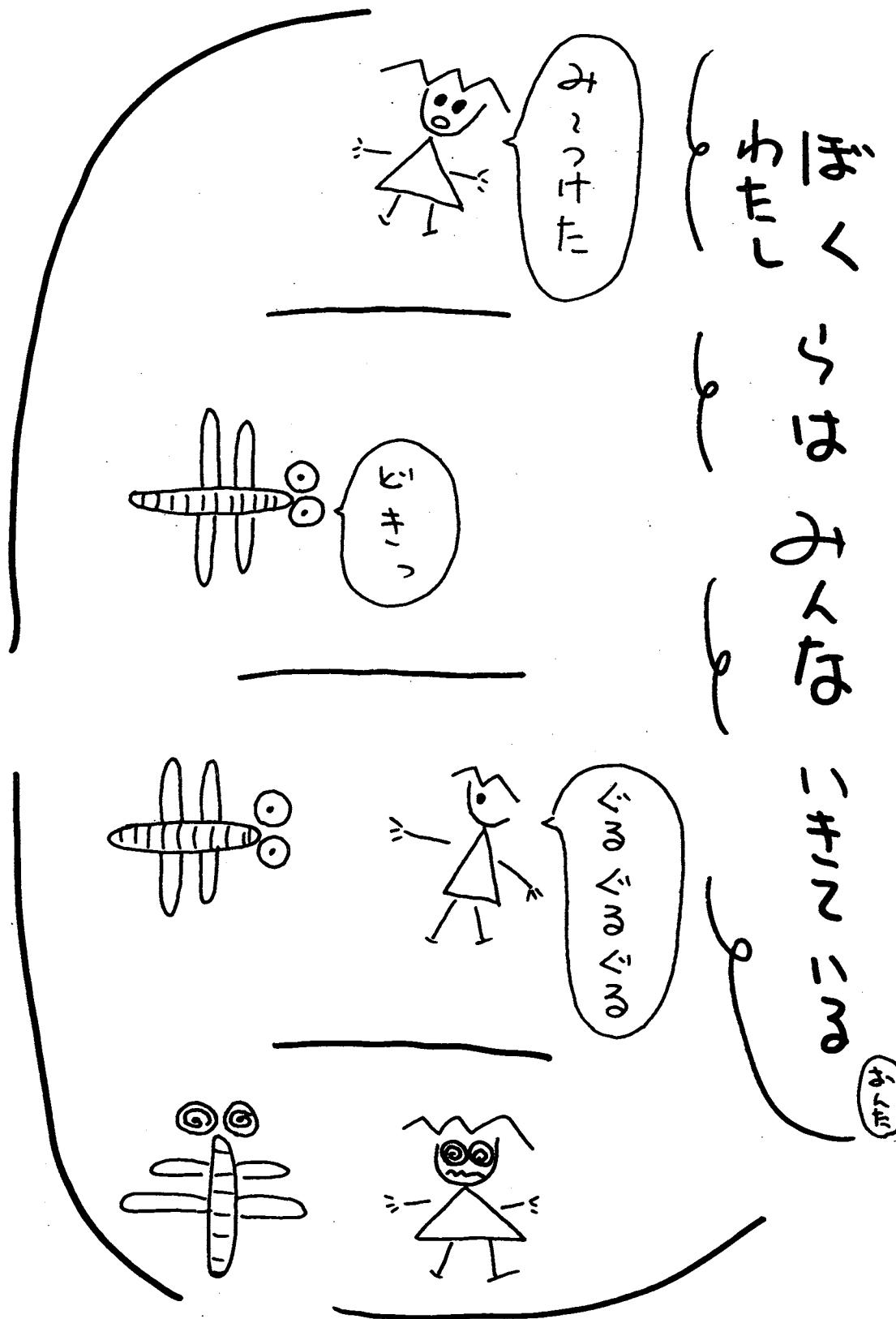
足立区伊興本町 1-16-19 フラット楽夢103

東武伊勢崎線 竹の塚えき西口徒歩8分

\*お茶の水、原宿、新宿の喫茶店へ出向することも可能です、遠方の方ご相談ください。

電話 090-3806-9387

ホームページ <http://salam@astrology.club.ne.jp>



# ある初夏のできごと

織田 哲

池袋というのは不思議な街だ。イマドキの若者で溢れかえっているかと思えば、新宿ほどではないけれど、野宿してゐる人たちと話しかけているひとたちをよく見かける。アーティスト風の若者と談笑していたり、外国人と語り合っていたり、こないだは某大学の学生が学術調査に来てたつて（調べてどうすんだろ？）。そんな中にはおもしろい出会いのひとつやふたつ、経験するひともいるんじゃないだろうか。

あれはひと月くらい前のことだった。いつものようにパトロールを始めたものの、真夏を先取りしたような強い陽射しと暑さに、ちょっとやる気もなく、だらだらと。なんだ、いつもといつしょじやん、と言われてしまえばそれまでなんだけど……。陽射しと暑さで人影もまばらとはいゝ、場所は線路沿いの公園。それなりに風のとおりもよく、木陰には顔見知りのおじさんが。しばらく話していると、大きな荷物を抱えたサラリーマン風の若者が近づいてきて話しかけてきた。

「ここにちは、きょうは暑いですね。ちょっとお話しさせてもらつてもいいですか？」

と言うそばから大きなカバンをあけ、やおら「電気シェーバー」を取り出した。聞けば、彼はこの暑いなかその「電気カミソリ」

を売り歩いているらしい。「外国製最高級品がいまならたつたの千円で」ということばに、

「なに？ それくれるの？」

「カンパでちょうどいいよ」

「お金くねなきや買えないよ」

などなど、反応はそれぞれ。言いたいことばつか言ってたのは共通だけども……。そこはさすが「営業マン」、圧倒されることもなきにこやかに店じまいをはじめる。

「それじゃ、暑いですけど氣をつけて」

「おう、営業がんばれよ！」

「ちゃんとひとみてから話しかけた方がいいぞ！」

「おまかせのことは（？）をかけていた。

こうした営業マンのような「路上街頭訪問販売」なるものがあるとは知らなかつたのでわたしにはちょっとした驚きだつた。どういう人に声をかけて売り歩いているのだろう、なんとなく危険な香りが……とか想つていたのに對して、その場にいあわせたおっちゃんたちはごく自然にうけとめていたようだつた。

「ああいうのは、二、三回使つたらこわれちゃうよ」

「さつきのみた？ あれで千円は高いんじゃない？」

「へンなもんつかまされて傷だらけになつたんじゃさ、バカみたいじやん」

おっちゃんたちもなかなかきびしい評価をしていたけども、そうしたことばのうちに、キビシサだけではない何か違つたものも感じられたりして。

五月ももう残りわずか、六月の足音とともに暑さもだんだんと

きつくなってきたころ、公園のヒイラギ（？）にはたわわに実がなっていた、ある五月晴れの季節のことだった。夜になると蚊がでて寝られないとか、雨の季節がくるから心配とか、そんな話をしていると、ちょっと離れたところが何やら騒がしい。言い争つているような様子も感じられ、おじさんといっしょに現場へ。

「ちょっと食べてみなよ」

「食べるかこんなもん！」

何が原因なのか聞いてみれば、たわいもないこと。ほほえましいというか、なんというか。公園に植わっているヒイラギにはぶどうのようなブルーベリーのよう、いかにもおいしそうな実がたくさんなっている。とくに西池袋公園にはたくさん植えてあるのだ。それを見ながらのやりとりだった。

「こんなにおいしそうなんだから食べてみなよ」

「やだよ、そんなに言うんなら自分で食えよ」

言い争い（？）は平行線をたどるかに思えたそのとき、

「うるせえなあ。そんなに言うんなら食ってやるよ」そう言ったがはやいか、パクリとヒイラギ（？）の実を口のなかへ。

「うわ、まじい。しぶくて食えたもんじゃねえぞ」と言いながら実を吐き出す。

「なんだあ、そうなの。こんなにおいしそうなのに」

けしかけた当人はいたつてノンキにこたえている。

「そりやうまかったらみんな食つてるべ」

「そもそもそうだよね」

横から別のひとりが、「毒かもしれないから気をつけなよ」とこ

とばをかける。

「もし具合悪くなったらフクシへつれてけよな」

なかなかに皮肉のきいたユーモアだった。

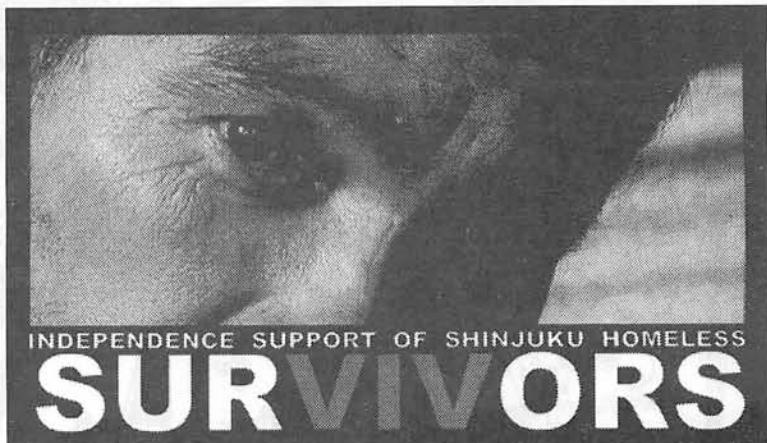
# 夏季限定新宿オリジナルTシャツ通信販売中！

右写真の図柄を綿100%白地Tシャツ正面にプリントした新宿オリジナルTシャツが完成！プロのカメラマン、デザイナーと新宿のおっちゃん達の夏季限定版共同作品。売り上げは新宿野宿者の炊出しなどの費用になります。

一着 1000円

(LL.L.M.Sサイズあり)

ろじゅく編集室でも代理販売中！お求めは郵便振替口座00160-6-190947「ろじゅく編集室」に住所、氏名、サイズを明記の上、送料200円を加算して送金して下さい。



# 湊町より

新潟県 新潟市 の信濃川が渓へ注ぐあたり、湊町。どうやら 駒木 裏から走る勝手道かな。  
ペー

今年の夏は日暮れ。人口でいうと、暑いの中、ウチには「トトロ」がな。しかしそれが何だ、夏に  
何ががめらごんとむ、駄菓子を貰えれば全然かあるといつてどな。か。この歳の様  
にトトロと流れる汗、こぼれと駄菓子だ、ああ、夏がせいたべ… たぶん、一人でまかり老えて日々

匂いじつに、だが、先日久し振りに「トトロ」に入り、  
涼しい店内で「…たまにクーラーもいしなあ…」と素直に語  
ていた。「あの天井あたりの誰の役にも立たなくなつた今、  
これが程、ウチにくわながなみ…」

店内を歩き回る。宝石市場の前を通りがかった。キラ

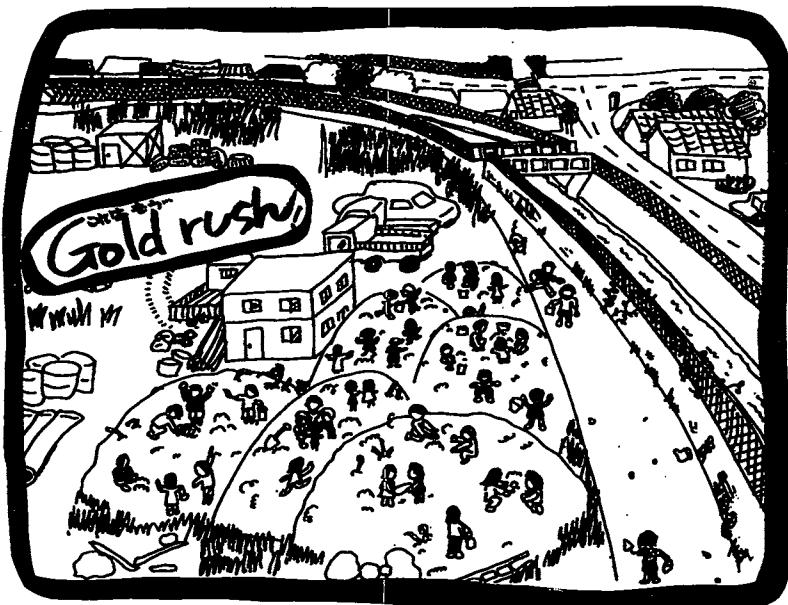
キラ光る宝石を見たう、つい、あんなことを思ひ出した。

「なあなあ、近い、工事現場でダイヤモンド出るなんて」と、友達が  
寄ってきて、ひらいた三の手の中には長さ十センチの、兩粒型のキラキラ  
光る固まりがあった。二十数年前、小学校の教室での出来事。この  
他にも菱型とか六角型とか色々あるらしいで。」「スゴイ、」休

み時間の「ことば語」で、もう元の田の放課後のマジでは決まりました。

放課後、近い工事現場はヘルプとバケツを持たる供たちが  
ウロコロった。つかは一気に広まり、なんかもう、ゴールドrush。  
欲望と好奇心が、ギラギラのマジで。いや、でも、キラキラとじうすりキラ  
キラ、だなあ。がむしゃらに掘り続ける群れ。何が何でも見付けるぞ。、  
やがて夕焼け空。おながすくて家に帰る子もまだしぶとく残るのも、  
砂利山も、トーブも、夕陽の色に包まれる。もう、ええそんな事が  
あたなあ(なんだあれ? 来、ダイヤモンドには砂利山が似合って  
いるよ)がしてくる。」…トトロが、駄菓子と涼茶をあこがとう。  
まだまだ行いつ…

高橋 美香



東京

第8卷

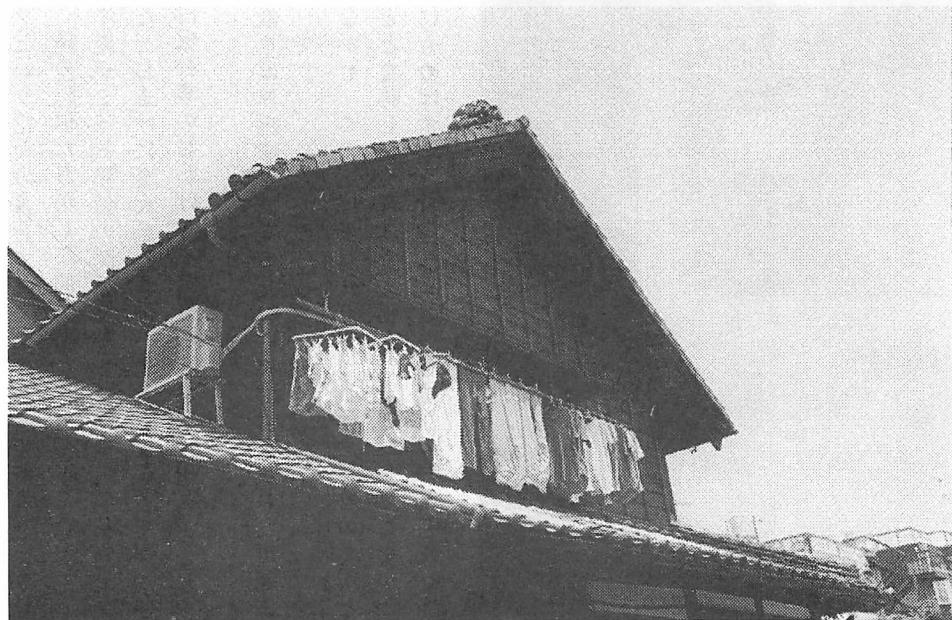
路上

散歩

ふらり

写真・岡田知子  
文・笠井和明

小江戸——川越





東京東部圏の夏の風物詩と言えば、七月初頭の入谷朝顔市、浅草はおづき市、そして七月下旬の隅田川の花火というのがたいがいのお決まりである。朝顔が咲き始める爽やかな初夏が、ドドドンという花火の轟音で真夏になるのである。そうやって夏の睡眠不足とけだるさは、諦めに似たおかしな開放感となる。

が、今年は何と不粋な事に沖縄サミット警備の関係とやらで隅田川の花火大会は八月下旬に延期されてしまった。おまけに皇太后の葬儀とやらも重なって都心部は警官がうようよ。東京の夏は国家行事のおかげで、只暑苦しいだけの夏。

という訳で、今回のふらり散歩は涼感ある真夏を見つけて都心を離れ、川越まで遠征することとなつた。

川越は東京にあらずと言うなれ。この地は小江戸と称され江戸幕府の要所として栄えた城下町。江戸っ子などと自称しながら江戸文化をさほど残してこなかつた東京人に比べ、度重なる大火にもめげず江戸町屋形式の土蔵造りの町並を残し続け

て来た川越の人々の文化意識は、江戸っ子よりも江戸っ子と言えるものがあるではないか。そもそも東京を考えるに關東の地方都市を歩かずして辻褄は合わない。

兄夫婦と一緒に埼玉与野に住んでいたというおっちゃんと最近新宿で出合った。農業を営む兄の手伝いをしながら六十過ぎまで働き続けて来たらしい。ところが、何がその家庭内にあったのかは定かではないが、兄嫁から一日一食しか食事を分け与えてもらえず、また、居辛くなるような言葉や態度を浴びせられ、このおっちゃんついに家出を決意。一銭ももたずにリックひとつに着替えを詰め込み、新宿まで水だけを飲みながら三日間歩いて来たという。ようやく炊出しにありつけ「米の飯はうまい」と、しみじみ。

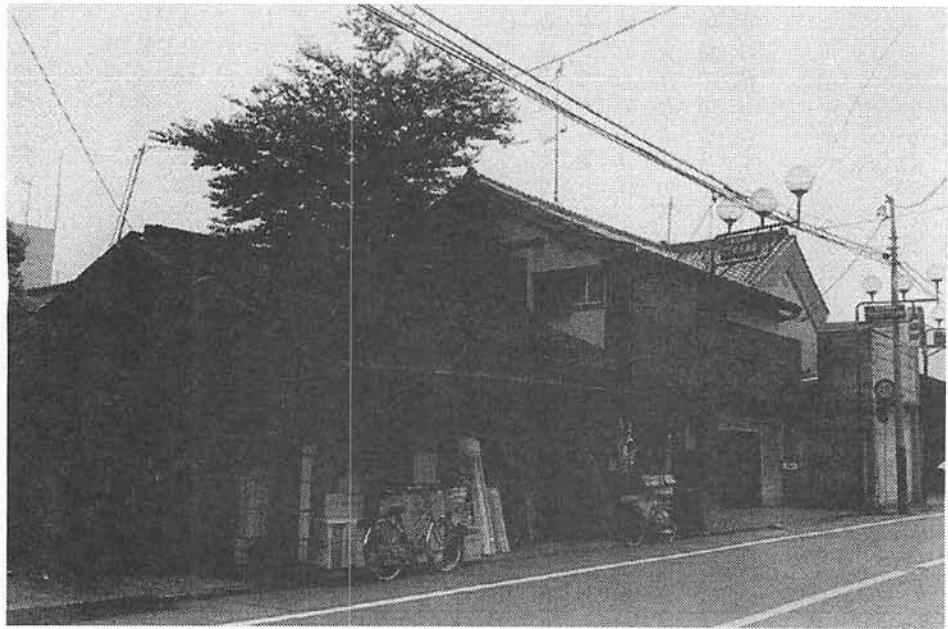
職を求めて都会に流れるのは、何も希望に満ちた学卒だけではない。地元で成功し得ぬこういうおっちゃんらの流動は今も昔もさほど変わらぬ構造である。田舎に帰つて面倒を見てもらえた人は言うだろうが、とりわけ家族という場は他人が思う程、幸せな空間であるとは限らない…… 東京と近隣の地方都市をつなぐ道は希望の道かそれとも絶望の道か？それを確かめに地方都市に出向くのも過酷な夏の旅らしくて良い。

川越の華やかな駅前通りをどこまでもまっすぐ行くと明治期に造られたであろう蔵造りの店や大正期のアールデコ風の建物が自然と目に入つてくる。よくぞここまで残つてくれたという感じである。無論東京にも同様の建物がなくはないが、それを探しだすのに一苦労、しかも全体の

街並としてこんなにしっかりと残つてはいない。観光名所として無理矢理残したのではあるまいかと穿つた見方も出来なくはないが、よくよく路地を行つたり来たりしていると、街並に結構雑然さがあり面白い。まあ、つまり、東京が破壊される過程で川越に自然と残つたものがそのまま、つまり、次第に日帰り観光地になってしまったのだろう。文化なんていふものはおうおうにしてそんなものである。

途中寄り道をした蓮馨寺の本堂脇にはなにやら怪し気な木像。「おびんづる様」と言い、その昔悪さの限りを尽くしたも釈迦の弟子となり「改心」した人物と説明書きには書いてあつた。同じ面構えと経歴を持つおっちゃんは新宿に幾らもいそな感じで思わず笑える。「改心」までい





川越のシンボルである「時の鐘」の前にはカメラをもつた外国人の観光客。「蔵造りの街並」に抜けると、そこも狭い車道にあふれんばかりの観光客。人々の好奇の視線を何気なくかわしているかのような黒い蔵造りの家々。真夏の陽が降り注ぐ古風な街並に店の風鈴の音が涼やかに鳴る。

近年の江戸ズームというのはなかなか鳴りを潜めないようで、大河ドラマの影響か「徳川ゆかり」というだけで観光客がわんさと訪れる。石原知事が人気なよう、閉塞時代にはある種の単純さというのもではやされるが、時代がここまで来ると封建時代をも懐かしくなるのだろうか。それでいて新しいものが良いとばかりに「徳川ゆかり」の東京をここまで破壊しつくすのであるから全く不思議としか言い様がない。尤も、「天海僧正の足跡」や「將軍家光誕生の間」とやらに興味を持てぬ僕らは庶民の息吹を偲べる古い街並を見るだけで事足りる。

ぐんぐん昇る真夏の太陽を浴びながら、菓子屋横町を抜け、新河岸川に沿って歩けば川越も只の古びた地方都市。廢屋に近い木造住宅の家族は一体どこへ離散したのか? 広々とした庭の真新しい住宅にはどんな家族が引っ越して来たのか? そんな想像を働かせるに十分な程、新旧入り乱れた没落と栄光の平べったい家並が続く。蔵造りの街並より、むしろこちらの家並の方がこの地方都市の眞実を言い表わしている。伝統だけで食つていけるのは一部の人々であるという現実の厳しさを。東京近郊の地方都市は過疎にはならない。古びた者を駆逐して新たに入

かずとも、失敗に寛容な包容力は時には必要である。そういうえば喜多院の五百羅漢も人間臭いので有名だが、そんなほのぼのとした面がこの街には良く似合う。

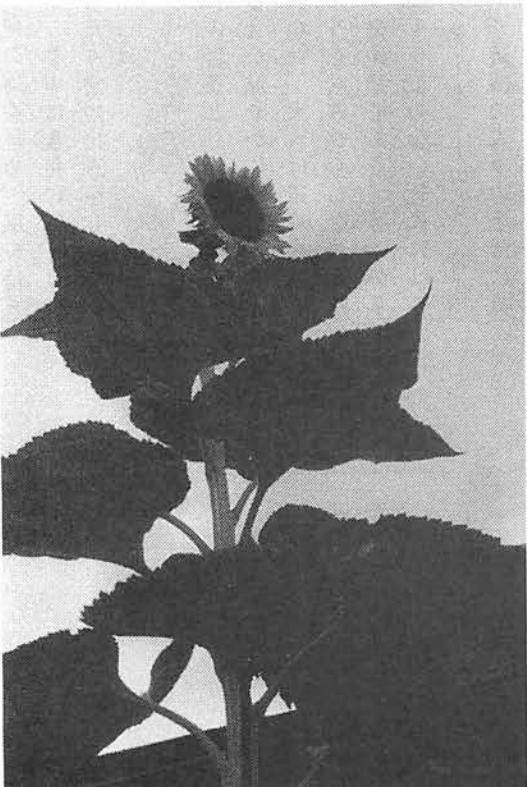
戦後期の建物か黒い丸みがかたた屋根の金物屋を写そうと相方がカメラを構えると、店のご主人、そそくさと店の中に笑いながら逃げ込む。「やべえ、撮られる所だつたよ」と言わんばかりのほのぼのさ。撮影後、こちらが頭を下げるに、ここにこしながらご主人も頭をペコリ。人情味というのはこういう日常のしぐさの中に現われる。嫌味のない文化というのはそれはそれで心地良い。

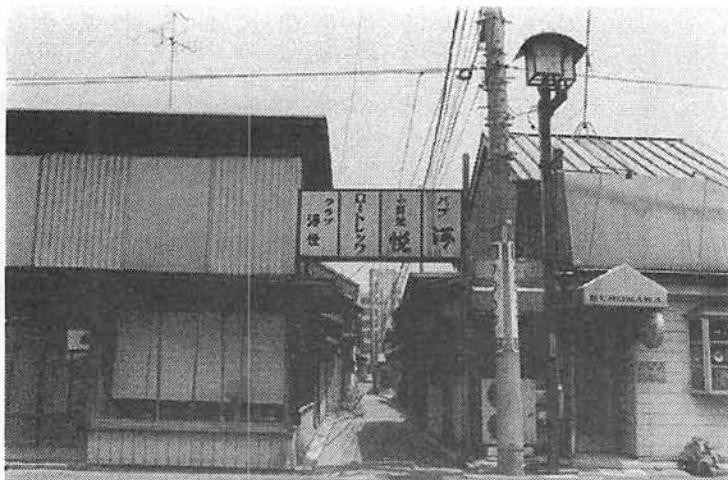
植者が土地を荒らす。一度離れたら、故郷が残らないのである。土地にしがみつくという事、家族を維持して行くということは、それはそれで大変な力と運がいる。

ひまわりだけは夏の日射しに花を咲かせながらまっすぐ向かっていける。人は灼熱地獄に向かっていけるほど強くはないが、その分、他人に優しくできる。おそらくこの街の人情味や人間臭さというのはそんな所から出ているのかも知れない。それは東京東部圏下町地区の専売特許ではなく、不幸や没落がついてまわる街の必然的な連帶意識なのである。都会の谷間にあるおっちゃんらのダンボール村、テント村でも同じであるように。人の営みは共同体を作り家族を作り街を作るが、それは永遠の固定物ではない。人の営み故に、そして時代の荒波の中、それを壊す者、そこにいられない者、そこから弾き出される者を作り出す。人が住む都市は、その流動を免れ得ない。運に抗うことなど出来やしないから、今いる人とのつながりだけを大事に大事にする。人情味とはそんなものなのである。そして、それも庶民が残して来た立派な文化である。個人の自立とやらはある種の理想であるかも知れないが、他人にすがれなくなつたら困る人などいくらでもいる。

初雁球場では炎天下の中、高校野球の予選大会。汗だくになり他人に夢を託すのもまたのどか。若きも老いもそんな無邪気さだけは忘れてはいけない。尤も暑いのだけは何人も堪らない。川越街道沿いにあるクラーの効いた店でひと休み。ビールをぐぐぐいと飲み干す。これぞ夏。

川越街道の東側はもう地方の農村風景。青々とした田園が一面に広がる。肥沃な関東平野の大地は夏を一段と輝かせる。海

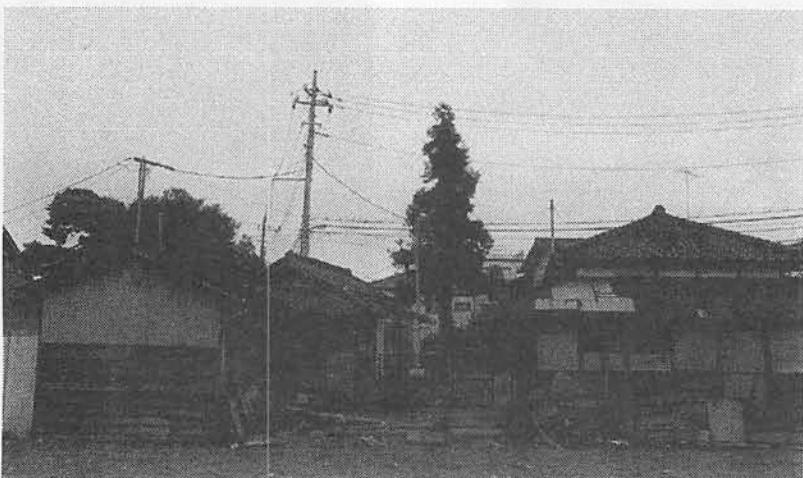




水浴もいいかも知れぬが大地の海を眺め、風を待ち受けるのもなかなかもの。都市は農村に囲まれて初めて存在する。そんな当たり前の接点をしみじみと感じさせてくれる。

球場の声援のさざ波を尻目に童謡「とうりやんせ」発祥の地と云う三芳野神社の鬱蒼とした森の細道を歩く。じやりを踏みしめる音が涼やかに響く。夕涼みには格好の場所かも知れない。大人は团扇を扇いで井戸端会議、子供はじやりを踏み鳴らしながら線香花火。夏の絵になりそうな神社である。暑いからこそ表に出で涼を取る。クーラーのない時代にはそれが当たり前だった。インターネットのない時代、人はそうやって情報を集め、近隣の人々の生活に直に触れながら生きて来た。おおらかな時代は人との関係もおおらかであった。商家や農家などに手作業はいくらでもあり、生まれた土地に辛うじてしがみつけた時代。地方都市が都会につられて変遷する中で出稼ぎなど流動を強いられる人々が多くなり、かのおっちゃんのようにやがて帰れなくなり、故郷を失い、コンクリートの都会の中で、ありのままの裸の人間として生きなければならなくなつた。それが希望なのか絶望なのかは良く解らない。ただ、解つているのはそこに住む人々は日々の営みから發する無理のない土地の文化を残すという事だけである。

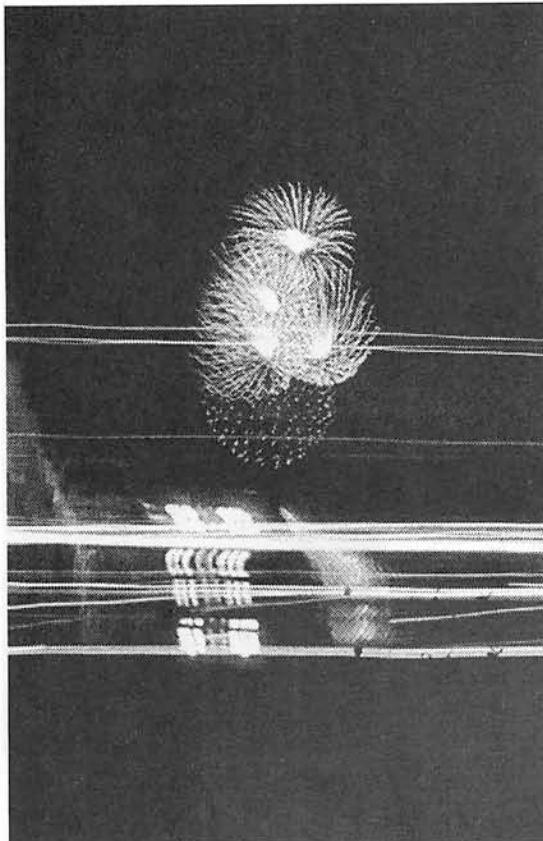
市立博物館で再び涼み、椅子に坐つて昼寝などをし時間をつぶした後、街中を再びふらふら歩く。夕



方、本川越の駅前に戻つて来た頃、突然の夕立。人々が逃げまどう中、乾き切ったアスファルトやビルに雨が容赦なく叩きつけられる。今夜の花火大会は大丈夫だろうかと行き交う人々は心配そうに空をながめる。強い雨はしばらく降り続ける。日射しが激しく夏の雨足は激しい。

破壊的とも言ふのか、その激しさの中に置かれた人々は、じつと耐え続けるしかないが、打ち上げ花火のように精一杯、夏への抵抗も試みる。激しさには激しさ、火には火という、もはや破れかぶれの戦法。耐えるに耐え切れない、諦めるに諦め切れない、その心境は良く解る。

駅前の「大吉」なる居酒屋で時間を潰しほろ酔い気分になる頃には辺りはもう夕暮れ、花火の轟音に誘われながら新河岸川まで戻ると、近所の人々が川の柵にもたれながらほのぼのと花火見物。伊佐沼までもちと距離があるものの、田園風景のかなたに咲く火の粉の大輪はなかなか見事な夏への抵抗。高層ビルの谷間に咲くあだ花のような花火に比べ、こちらの方がしつかりと夏らしい。



# 「光ほのかなれども？」 二葉保育園と徳永恕

上笙一郎・山崎朋子著

(社会思想社刊・現代教養文庫)

私にもし子どもが生まれたら「是非、恕(ゆき)」という名前をつけたい!」とひそかに考えている。恕という字は「(他者の痛みをわが身のそれと感じて共に泣くような)あたたかな心」を意味する。

その名に恥じない生き方をした徳永恕さんは、今から百年前に東京の代表的なスラム街だった四谷で二人の女性が作った二葉保育園の責任者として、さらに後には母と子の居場所を作るなど、一貫して社会福祉の仕事を続けた女性だ。

今日の社会福祉制度は、整ってきた側面はあるものの、一定程度の枠を設け、そこからはみ出した人は支援の「対象」としないという現状

がある。しかし、徳永さんは梓からはみ出した人こそが、最も支えを必要としていることを見抜き、自分が支え手をかつて出る。「明日の救い」を待つていられない人々を支えるということの原点を彼女に見る気がする。

起居を共にしている訳でもなく、週末ボランティアとして新宿に通う私だが、それでも「こんな場合、どうしたらいいのか」「どうしたら状況が変わるのだろうか」などと迷つたり、自分自身が少し疲れてしまう時がある。そんな時に、私はこの本を読む。

あまり根性はないし、強い信念も持ち得ていない私だが、正解はなくとも、通り続けてみなさい、と私を支えてくれるのがこの本だ。

誰にとっても「こんな人と出会えたらいな」と思われてくれる徳永さんであるし(私が生まれる前に亡くなってしまったので叶うべくもないが)、著者の山崎さん&上さんの魂が込められていて、読み応えがある。

池田 幸代

〈野宿者女性の会  
「心を開く輪」メンバーメンバー〉



## 恩田さんへ

私も同感です。私は精神病であるが看護学生が来ると「あなたは可哀そうですね、私が助けてあげます。」バカかこいつ！今まで病気で苦しんだが人にたよった事ないわ！それで自己満足して帰る、私はそういう奴には一言もしゃべらんかったわ！ホームレスになった時もそう、ボランティアに「あんた自己満足でやってんやろ！俺達を食べ物にするな。」とけんかになった事もあったわ！俺達にだってプライドがある。まさか支援者にもいたとはね！がっくりじゃ！そう俺も何度もプライドを傷つけられた。ホームレスやって支援の活動をやっていたのもホームレス脱出を考えいつか東京で働く事を夢見てたからじゃ！きたないかもしけんが俺はそういうふうに考えとったわ！一人でもホームレスが社会復帰できる事を夢見てやっとったわ！ボランティアでも自己満足する者と本気でとり組む者、えらい差があるね…東京で見てきたからわかるわ！俺は本気でとり組んどったわ！残念ながら！田舎につれもどされたけど、こうやって露宿に詩をのせて（露宿のご好意により）ホームレスとまだかかわったるぞ！当然他の人の作品も見よるわ！大変さがこっちに伝たわるわ！恩田さん…いつか話をしましょう東京に俺がきた時でいいです。最後に支援者も本気でとり組め！…以上

土屋太

## 土屋さんへ

いるんだねーホント。「あなたは可哀そうですね、私が助けてあげます」って人がさ。やだねー。それにしても土屋さんから同感の返事が来て、嬉しかった。私の文章に何かしら反応はあると予想していたけれど、わかってくれる人がいるのは良いもんだね。ありがと。

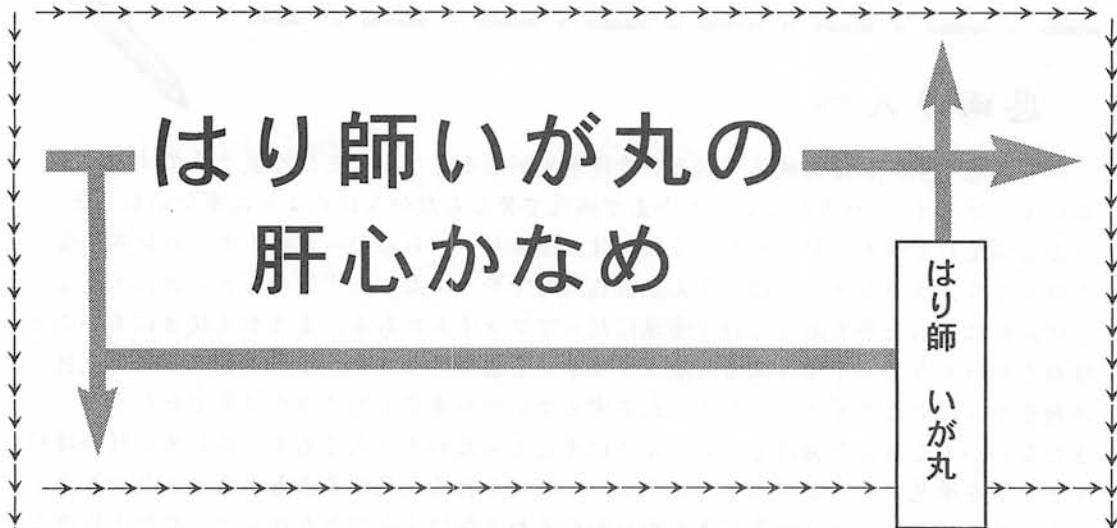
ただひとつだけ、うーんこれは私とは違うと思ったのが、「ボランティアでも自己満足する者と本気で取り組む者、えらい差があるね」っていうくだり。確かにボランティアも千差万別、いろんな人がいるけれど基本的に人間はどんな人であろうと自己満足で生きているんじゃない？よく無償の愛っていうけれど、これですら自分がそうしたいからするつて事に他ならない。だからこそ、自分の行動の全ては自己満足なんだって認識した上で人と接すると随分違うと思うんだ。

土屋さんも私も、他者からプライドを傷つけられた経験があるから、善意の押し売りには敏感になるんだよね。私はホームレス体験は無いけれど、ちくちくと小さい頃からプライドを傷つけられたもんねー。相手は全然気付かないところが悔しい。

そうそう私、土屋さんに逢った事あるよ。えーっと、一年前の新宿夏祭りかな？土屋さん、ギターの弾き語りしなかったっけ？その時司会をしていたのが私だよ。いつか逢つて話したいね。楽しみにしてる。

恩田より

追伸・露宿七号に載った、好きな人の絵と詩いいね。人を好きになるって、もの凄いエネルギーが生まれるよね。そのエネルギーが、どかーんと伝わってきて素直に感動した。私も今度、好きな人の似顔絵描こうかな…



勤め先の治療院に、週2回夫婦で来院する50歳過ぎの患者さんがいる。ふたりとも障害を持っていて、夫人は足が不自由で車椅子に乗っていることもあり、いつもボランティアがひとり付き添って来る。ボランティアは毎回違う人で、30—40代の女性が多いのだが、学校が休みの時期には福祉を勉強している学生が同行することもある。年配の人は、彼女と意思の疎通がうまくいかないことがあると、「泣いても分からぬよ！はっきり言いなさい！」と叱ったりする。一方、若い彼女たちは絶えず笑顔である。おしなべてとても気をつかった親しげな言葉遣いと、懸命な眼差しを持っている。私も初めて山谷に赴いた頃はそんな表情をしていたんだろうな、と思った。なんせ「路上」を知るまで、福祉とはなんぞや、労働とはなんぞやなんてことは考えたこともなかった。そして、その頃の私なんてハタチそこそこで、山谷のセンパイ達から見れば彼らの娘同然だったにちがいない。「あんたいくつだい。俺の娘もあんたくらいでなあ」なんてことばかり言われて、へらへら雑談ばかりしていた。

本誌前号の「支援者に告ぐ」の項では、恩田さんが厳しく「善意の押し売り批判」をしていた。心当たりがあるのは私だけではあるまい。新宿に限らず路上に限らず、世の中にボランティアはいっぱいいる。人の役に立ちたい、困ってる人を助けたい、は結構なことだけど、本当にそういう存在になるには、そのための知識や技術を身につける必要がある。そして何よりもまず、自己と向き合わねばならない。自分と向き合えない奴が他者と向き合えるわけがない。向き合いきれなかった時、善意というやつだけが、ひらひらと姿を変えて飛び出していってしまうのだろうか。はたまたそれは偽善と呼ぶのか。

今でも野宿の仲間の年齢をきくことがあると、自分の父の齢と比べることがある。それでも今、野宿の仲間に自分の子供とだぶらせたような懐かしそうな目で見られることもなくなったのは、……ただ単に臺（トウ）が立っただけかしらん。

## ◇求む！路上の表現者！

「露宿」は路上にこだわる全ての皆さんの投稿によってなりたつ雑誌です。表現こそが生きる証であり、存在の証であると考える皆さん、ろじゅく編集室では皆さま方よりの投稿作品を心よりお待ちしております。俳句、短歌、川柳、詩、小説、隨筆、様式は問いません。得意の表現方法で「露宿」に息吹を与えて下さい。「露宿」9号は10月25日発行予定。原稿〆きりは10月1日まで必着でお願いします。

## ◇広告主＆スポンサー募集中！

「露宿」ではレイアウト代込み半ページ5000円にて広告を募集しております。原稿をFAX、郵送もしくはメールにてお送り下さい。意見広告、集会案内、店舗案内、団体案内なんでも可。不明な点はご一報を！

また、一口100円からスポンサーも大募集中！スポンサー費は「露宿」の編集費はもとより、路上映画会や路上音楽会など路上文化活動の資金にもさせて頂いております。「露宿ベン俱乐部便り」の発行が大幅に遅れて申し訳ありません。早急に発行し、スポンサーになられた方々にお送りいたします。

### [露宿定期購読の御案内]

路上文芸総合雑誌「露宿」はもちろん全国の本屋では売っていません。毎号確実に読者のお手元に届けるために当方では定期購読を承っております。  
定期購読8回分 5000円（郵送費込み）  
定期購読4回分 2500円（郵送費込み）  
一回ごとの購入でも大歓迎。一冊送料込みで660円となります。その場合は御面倒でも継続購読を連絡して下さい。

### 申し込み方法

郵便振替用紙(00160-6-190947ろじゅく編集室)に定期購読もしくは継続購読とお書きになり、住所、氏名を明記の上送金して下さい(発行ごとに郵送します)。尚、郵便振替の他、切手での受け付けもしております。FAX、メールにても注文承り中。

まとめ買いはお安くなります。

2冊以上は送料無料、5冊2000円、10冊3500円、50冊15000円(いずれも送料込み)となります。

### 編集後記

雷鳴の 轟く夏に また誰か

哀しみかかえ いるの？と思ひ

お天気が、誰かの感情を代弁しているかのように思えてしまうのは私だけ？今日も夕立ち。皆さんは何を思い、過ごす夏の夜かな。夏といえば、蚊取り線香、盆踊り、かき氷に打ち上げ花火。小麦色の子供らに懐かしい日々を思い起こす。綿菓子のような雲を眺め、あちい一夏をしのぐ今日この頃です。空高くなる頃また！(お)

### 露宿ベン俱乐部便り

3号の表紙に詩を投稿下さった野田さんが寿にて永眠。昨年の秋、山谷センター前にて即興で書いてもらつた詩です。山谷の闘士であり詩人であつた氏の冥福を祈ります。  
また、常連投稿者の田代猛さんと五林修さんが相次いで入院なされました。一日も早く快復されるよう願つて止みません。病床の五林さんは原稿の束が届く予定です。次号に掲載致します。

### 露宿バックナンバー

#### 残部わずか！

露宿バックナンバー創刊号、3号、4号の在庫が残り少なくなりました(2号は売り切れです)。限定1000部発行の印刷物ですのでお求めはお早めに。5号、6号、7号の在庫はまだあります。お求めはろじゅく編集室までご一報を。2冊以上は送料無料、5冊セット2000円、6冊セット2500円で販売しております(尚、在庫が切れた場合はご容赦下さい)。

# Rojuku

定期購読大募集

♪露宿を置いて下さるお店・スペースを探しています。お気持ちのある方はぜひご連絡下さい。まとめ買いの場合は、とてもお安くなります。

♪露宿では広告を募集しています。又、投稿お便り、大歓迎です。下記住所のほか、「露宿ペン俱楽部専用ファックス」03-3981-6746がございます。「露宿」の注文・原稿送付・広告申込・お便り等、何にでもお気軽にご利用下さい。

「ろじゅく

この雑誌は、路上生活の方達が読み、書き、表現をする場を提供する為、つくれました。一冊でも多くの雑誌を印刷し、路上生活者の方に手渡したい思いと、利益が出れば焼き出しのお代にしたい為、心苦しい限りですが、多くの方のご理解とご支援をお願い致します。皆さんのお気持ちに届く、熱く丁寧な雑誌づくりを目指します。

購読費・スポンサー費送り先

郵便振替口座

00160-6-190947

「ろじゅく編集室」

露宿 ROJUKUはココで買えます。

◆模索舎 東京都新宿区2-4-9 TEL/FAX 03-3352-3557◆TACO ché 東京都中野区中野5-5-2-15  
中野プロードウェイ3階 TEL 03-5343-3010 FAX 03-5343-4010◆スペースかばす 東京都新宿区大京町3新大京マンション304号TEL 03-5367-5666◆山谷労働者福祉会館 東京都台東区日本堤1-25-11 TEL 03-3876-7073◆新宿中央公園ポケットパーク（毎日曜午後6時から8時まで）  
TEL090-3818-3450◆石手寺 愛媛県松山市石手2-9-21 TEL089-977-0870◆城西教会 東京都渋谷区西原1-19-3 TEL03-3466-0445

路上文芸総合雑誌「露宿(ROJUKU)」第8号 2000年8月25日発行(隔月刊)

主宰・笠井和明 編集/発行・ろじゅく編集室 〒170-0014東京都豊島区池袋1-14-5-13

TEL/FAX 03-3981-6746/090-3818-3450(笠井)

Eメール・rojuku@d9.dion.ne.jp URL・<http://www.d9.dion.ne.jp/~rojuku/>

郵便振替口座 00160-6-190947 加入者名「ろじゅく編集室」

販売協力・新宿連絡会、露宿ペン俱楽部 印刷・株式会社ラジオグラフィー